



彼らの捨てた人生 —プロバンス紀行—

戸倉仁一郎*

○三者の説

学者、役者、芸者を三者(さんしや)と言い、互に共通点をもっていると指摘したのは、幸田露伴である。これらは何れも、パトロンがなければやっていけない職業であるという。学者の本代、役者の衣裳代などはもちろん、これら三者は本来、金もうけに直接つながっておらぬからである。

同じ探求の徒であっても、画家となると千差万別であるのは、一管の筆と少々の絵具があれば足りるからであるかも知れない。小川芋銭は絵をもって芋を買う 銭さえあれば足れりとした。一方で尾形光琳や酒井抱一は、何不自由ない暮らしの中で、好き放題の一生を送った。そうかと思うと、渡辺華山は田原藩の貧乏家老であって、その生活を助ける糧(かて)として、絵を描いたということである。パトロンどころではなかったのである。

しかし、ここに巨万の富を積み、さあこれをやるから傑作を描けと言われても、誰にでも出来る事ではない。これは芸術だけとは限らないが、その人の素質とか意欲が問題であることは、きまった話である。

○人間の才能はいつあらわれるか

史上有名な画家の伝記をよむと、ほぼ2種類の才能のあらわれ方がある。例えば雪舟のごときは子供のとき、いくら叱っても絵をかくことをやめず、終にはしばられたままで、涙を足でなすって描いた**ねずみ**が生を得て動き去ったという。そんな話は**大袈裟**としても、池大雅は5歳で立派に書をかいているし、上村松園はもと

より川合玉堂にしても、土田麦僊も幼少のころから天才ぶりを発揮している(神童型)。ところが菱田春草や横山大観らは、青年期になってやっと、絵かきとして立つ志をかため、当時の美術学校へはじめて初めて絵の修業を開始しているのだ(後発型)。まして大器晩成ということもある。明治の富岡鉄斎や近くは熊谷守一は、年を加えると共に仙境に入り、神韻びょうひょうの絵をかいたことは万人の認めるところである。以上は主として、村松梢風の本朝画人伝、Vol I～VII(昭和15～18)、改版 Vol I～V(昭和48)、中公文庫 Vol 1～8(昭和51)によるものである(この本は私の愛読書の一つである)。

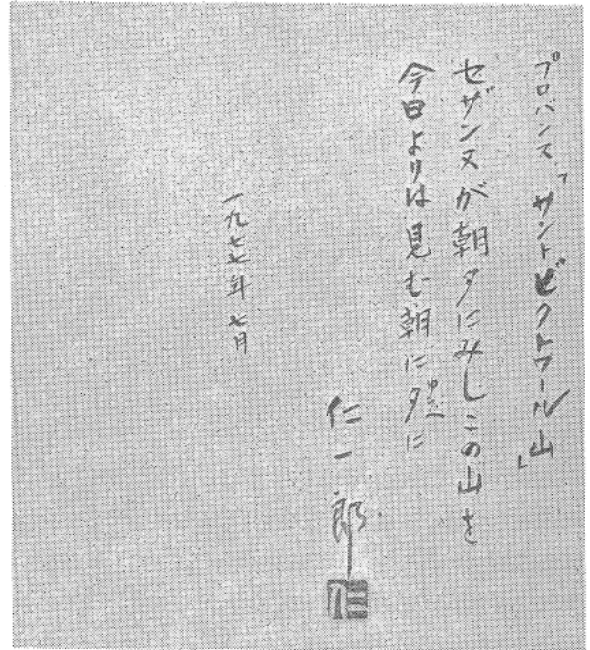
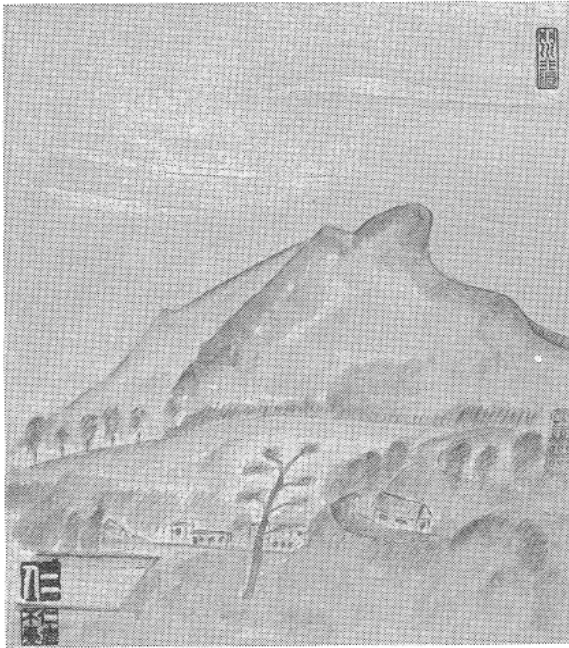
○あなたならどうする?

さて、極めて特筆すべき三人の絵かきがいる。それは、ゴッホ(フィンセントファンゴッホ)、ゴーギャン(ポールゴーギャン)、セザンヌ(ポールセザンヌ)の三人で、何れも19世紀後半に活躍したことは誰でも知っている。

話は少しかわる。あなたの息子さんが、或日絵かきになりたいと申し出てきたら、あなたは どうする。「やめておけ、画をかいてはとても喰っていけないよ」とさとすだろう。もし、あなたの夫が、相当な収入と幸福な家庭の中で、突然、仕事をやめて絵かきになると言い出したら、きっとあなたはびっくり仰天するにちがいない。

人生は一つの事を成しとげ、究めるには短かすぎ、といていい加減に日を送るには長すぎる。ゴッホは生れつき絵が上手であったとはいえ、もう少し勉強しておれば、彼の父(牧師)のあとをついで、オランダの小さい村で聖職者としての平和な一生を終えることが出来た筈で

* 戸倉仁一郎(Niichiro TOKURA)、大阪大学名誉教授、長岡技術科学大学教授、工学博士



あった、しかしあちこちで、喰いつめ者になり、叔父の画商の手つだいをしているうちに、——（この画商の仕事も遂には追われるのだが）、画を描く以外の何のする事もなくなって、絵をかいた。（註 フインセント ファンゴッホ、大久保泰 日動画廊 1976、ゴッホ書簡集 Vol I～VI 小林秀雄ら監修、粟津則雄ら訳 みすず書房 1970～、H. ペルシオーのもの 紀之国屋書店など 無数）など。

○一度きりの人生、私の選んだ道

北欧生れの奥さんと5人の子供、年収4万フランの株式仲買人であったゴーギャンが、日曜画家にあき足らず、家を捨て、安楽なくらしをすてて、何故タヒチ島に赴むかなければならなかったか（註 ゴーギャンについても C. シャッセ 島田、末木訳 造形社（1977）、福永武彦、新潮社（1972）、H. ペルシオー 窪田訳、紀之国屋 1965、などがある）。

また、セザンヌは、巨万の富を積んだ銀行家の父の業を継ぐため、法律の勉強をしていたのだ。また、小学校、中学校は優等生であったが、いつの間にやら絵のとりこになって了った。小学校や中学校では、デッサンの成績はよくなかったという。そんなことで、彼の50代で父が死ぬまで、父からの僅かの仕送りで生活した。妻にも父にも馬鹿にされ、親友のエミル・

ゾラにすら見離されたセザンヌは、漸く60歳になって名を知られるようになる（註H. ペルシオー、矢内原訳 みすず書房 1963、1976）。

彼らは次のことで共通している。人生に対して彼らは真剣に問いかける。自ら把握することのできないような絶大なものを目指し乍ら、おのれをさいなみ、火のように燃えて苦悶する魂の持主である。彼らの生活は、ただの職人よりも貧しく、その仕事は苛烈である。金銭にも無頓着であり、生活を優雅にするようなことには少しも心を引かれず、名声も問題にならなかった。彼らはそういう人生をすべて捨てたのだった。自ら満ち足りる生活をする事、それが彼らの人生であり、彼らの選んだ道であったのだ。彼らは何よりも自分に納得のゆく人生をやりたかったのであった。

○印象派の絵かきたち、大原美術館など

上の三人は後期印象派と呼ばれる人々であることは、いまさら申すまでもない。日本では倉敷の大原美術館、東京八重州のブリヂストン美術館、国立西洋美術館などに彼らの労作が残されている。

私が初めて大原美術館を訪れたのは、岡山の高等学校に在学中で40年前、大原美術館ができて間のないころであった。その頃、倉敷は静かな工場町であった。印象派の画家達はここで、

一堂に集っていた。うち、セザンヌの風景は「白樺」の人達が寄託したものである。ブリヂストン美術館にあるセザンヌは、その自画像がすばらしい。何度見ても飽きない絵である。そして壁面の彼方に、彼のサントピクトワール山がある。帽子を深くかぶり、頬ひげを伸ばした自画像は、何か言いたげである。「俺は妻にも、父にも、妹にも親友のゾラにも見棄てられた。しかし俺は絵筆を離さないぞ、俺のかく絵はまちがってはいないのだ。いまに君達は俺が死んでから悟るだろう。きょうもかく、明日もかく。俺の独自の筆さばきや、色調をいつか皆が真似する時がくるのだ」とでも言っているのでもあろうか。

○アルルの夏

この夏(1977年)私はプロバンスを訪ねる機会があった。アビニオン、アルル、ニーム、マルセイユ、エクスを歩きまわった。明るい太陽と緑の丘陵、そして石灰岩の山々、これがプロバンスである。

アルルの町はバカンスの人で溢れ、ローヌ河がゆっくり流れて、町をとりかこんでいる。城門をはいると、二千年の歴史をあらわす、昔の闘技場が半ば崩れかかっており、古代劇場の跡もある。例の黄色い建物、ローマ人の墓場などが残っている。ハネ橋も市内に残っている由だがお目にかからなかった。汽車の沿道でみた麦畑、糸杉の林、ひまわりの畑など、ゴッホのテーマが、百年あとのきょうも残っているのは、感銘が深い。ゴッホは毛糸の束をつかって、自分の絵の配色を工夫したという。彼の絵に強烈だが一面あたたかくほのぼのとした感じがあるのはそのせいである。

崩れかかったアレナ(闘技場)の坂道から、ゴッホに追われるゴーギャンが出てきそうな気がした。たそがれ時まで、心ゆくまで町をさまよった。ゴーギャンは腕力もあり、けんかにも強かった。ゴッホに追われて逃げ出すこともなかったであろうが親友と争いたくなかったのだ。彼はやがてマルセイユへ出て、タヒチ島に向う。彼は島にいても決して世捨人ではなく、人と争ったり、島の役人にクレームをつけたり

している。彼の描きたかったのは素朴な自然であり、したかったのは簡素な生活である。芸術は月である。人の世のくらしは、六ペンスにも値しない。ゴーギャンをモデルにしたS. モームの小説「月と六ペンス」のゆえんである。

ゴッホの入院していたという、サンレミの町も通った。ここでは病院も、ホテルも、レストランもゴッホをもうけのタネにしているという感じである。それにしても、南フランスの小さな町、いたるところに、気の利いたレストランがあることよと思う。

○エクスにて

7月の終りごろ、とうとうプロバンスの首都エクスにきた。マロニエの実がぶら下るころである。セザンヌが生れ、暮し、死んだ町は生き活きしていた。ミラボー通りのうっそうとしたすずかけの並木、苔むした二つの泉、ここにセザンヌの最初の家があった筈である。市の東北部に昔の大学と教会があり、ここをさらに北へ抜け行くこと2キロ余、丘の中腹の左側にセザンヌのアトリエが残っている。このアトリエはセザンヌの名声が増した64歳の時作ったものである。木造の質素な二階建てだが、深い緑につつまれている。あの有名な「少年」の絵や、つばや瓶やしゃれこうべが並んでいた。

父が残した遺産を、彼はその50代で受け継ぐことになる。しかし彼は相変らず絵を描いた。「たった一つのリンゴでパリ中をおどろかしてやりたい」、そんな心で同じモチーフをくりかえし、くりかえし描いたに違いない。このアトリエの前に立つと、真摯な制作を続けて倦むことのなかったセザンヌの純粋な気持が身近く感じられる。絵をかく以外に、彼の人生にとっては、何の言い逃れも、言いわけもなかったのだ。

彼は1870年のプロシヤとの戦争も、親友ゾラのひきおこしたドレフェス事件にも無関心であった。

そして真白い画布に向って、恐れおののきながらかき続けたのだ。「目だけでは不十分だ、よく考えることが必要だ」と自分に言いきかせながら。

このシュマン・デ・ローブ（別名セザンヌ通り）のアトリエから少しゆくと、公園住宅の団地がありやがてサント・ピクトワール山が見えてくる。セザンヌが60年余の間朝な夕なに見た山である。山が殆ど石灰岩でできており、緑は少ない。山麓は森になっている。ここで気がつくのは、あのセザンヌの「白」は、石灰岩の白であるということだ。えにしだや夾竹桃の咲く道を下町に下った。

○生命はまた花を開く

彼ら三人は簡単に言えば、自分で自分を燃焼させたのである。また時代を先取りしていたとも言える。開拓者の悲哀である。

世俗的に言えば、彼らは薄幸であった。そして百年後の今日、われわれは彼の前に香を焚い

ている。

彼らを支持した友はあったのだろうか。それとも、ほんとうの孤独であったのであろうか。ゴッホは一生独身であったが、兄おもいの弟テオとの愛情に支えられた。二人は北フランスの同じ場所で並んで眠っている筈である。ゴーギャンは家庭を捨てたが、詩人マラルメとのこまやかな愛情が記録に残されている。セザンヌはどうか、若き日はエミール・ゾラの友情と激励に依ったが、晩年には絶交した。ガスケやゴーギャンなどは彼のかわらぬ支持者であったという。

この三人には不思議にも婦人の愛は出て来ない。「しよせん男の行く道は、なんで女が知るものか」なのであろう。